れた孫文全集の各版本を比較すると共に、一九七三年に刊行された新版全集（全六冊、従来の全集には未収録であった欧文のものも一冊にまとめてある）を紹介、その編纂の経過を述べている。⑥は「国父致外国友人英文信」（訳文）、「国父手令」、「国父手絵民生主義図解」「国父家書」の四件の史料を紹介したものである。⑦は右の⑥の「国父家書」に考訂を加え、注釈を施したものである。⑧は孫文伝記の研究史ともいうべき論文である。⑪は孫文関係の独文史料および独文著述の紹介であり、⑫はフランス文資料の中にあらわれた孫文像を具体的に叙述したものである。⑬は孫文および革命派と関わりのある史料・著述・新聞などを列挙したもので、南洋華僑と孫文との関係を考察する際に、大いに参考になろう。⑮は「独立雑誌」The Independent に発表された孫文の三篇の論文（1）China's Next Step 2.）The Chinese Republic 3.）Plain Speaking from China の訳文・原文を併載している。⑱は孫文の革命運動の好き賛助者であった米人 Homer Lea（1876～1912）に関する資料紹介で、孫文からリー宛ての書翰十一通、ミセス・リー宛ての書翰十一通を原文で掲げている。⑲は孫文に関連する日本語の著書・論文のビブリオグラフィで、発表の年代順に列挙している。『思想』三九六号の野沢豊編「日本における孫文関係文献目録」にかなり依拠したもののようである。付録の「国父旅日年表」（初稿）は出典の頁数まで示されており、よい参考になろう。

以上、述べた処でも明らかなように、本書は研究書というよりもビブリオグラフィであり、史料紹介である。それ故、今後孫文について研究する者にとっては、まず最初に参照すべき便利なハンド・ブックということができよう。但し、内容目次によってもわかるように、全体の構成が必ずしも一貫しておらず、また各執筆者間でかなりの重複部分があり、一冊の本として不揃いな点が目立つのは残念である。（A5判、五八〇頁、目次三頁、写真三頁、叙文八頁、中華民国史料研究中心、一九七五年一一月一二日）

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所編

アジア・アフリカ文法研究 4 特集：述語

長野泰彦

本書は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所が行っている共同研究プロジェクトの一つ、「アジア・アフリカ文法調査票に関する研究」（代表者・石垣幸雄氏）の研究報告書で、一九七四年五月から一九七五年一〇月までの研究発表のうち、直接「述語」に関連のある論考をまとめた論文集である。執筆者と論文題目は次の通りである。（以下敬称略）

湯川恭敏　チベット語の述語
奈良　毅　ベンガル語における述語の構造
YAMADA Yukihiro（山田幸宏）　Itbayaten Predicate
橋本　勝　現代モンゴル語の述語
藪　司郎　ビルマ語の述部の構造覚え書
小田真弘　サモア語の述語
田村すず子　アイヌ語沙流方言の動詞接尾辞
崎山　理　インドネシア語の述語――その若干の問題点――
梅田博之　朝鮮語の述語
坂本恭章　モン語の述語
NAKANO Akio（中野暁雄）　Predicative Construction in Arabic Construction of Verbs
KAMIOKA Kōji（上岡弘二）　Modern Persian Predicates
守野庸雄　スワヒリ語の述語
ISIGAKI Yukio（石垣幸雄）　Somali-Amharic-Armenian Predicatives

以　上

一九七五年四月以前に同プロジェクト研究会で為された発表の内、本書に収録されていない述語関係の論考は、『アジア・アフリカ文法研究』一～三号に掲載されている。参考までに、言語別にそれらを挙げておこう。（数字は号数）

アイヌ語（田村①②　古川恭子①　村崎恭子③）、アラビア語（内記良一①）、カンボジア語（福田権一①）、グワンダラ語（松下周二①）、高砂諸語（土田滋②）、チャド語（松下②③）、朝鮮語（梅田①　古川③）、日本語（南不二男①）、バスク語（石垣③）、ビルマ語（藪③）、ヒンディー語（溝上③）、フルフルデ語（江口一久③）、ヘブライ語（内記①）、ペルシア語（内記①）、ベンガル語（奈良①③）、マライ・ポリネシア語（崎山①②）、モンゴル語（橋本①②）、一般論（湯川①②③　石垣②　黒川洋③　村崎③）

以　上

本書に収録されている論文を、それぞれの言語の各論に亘って批評することは到底できないので、ここではチベット語述語についての論考（湯川）のみを取り上げて紹介するが、その前に、全般的なことに触れておく。

先ず、本書が特集・述語を標榜するからには、同プロジェクトに於いて、特に「述語」を扱うことがどのような意味を持つのか、どのような視点から「述語」を追及するのか、又、同プロジェクトで「述語」という場合、一応の約束事として何を指すのか、といった説明が欲しい。

次に、一般的には述語とは「陳述という文法機能を有し、

文の最も基本的な成分である言語形式」と考えられているが、仮にこの考え方に従うとして、各言語に於いて「述語」たり得る言語形式はそれぞれ何であるのかが各論文で明記されるべきだと思うが、この点を明確にしているのは、湯川、藪、山田、橋本、崎山の各論文のみである。

湯川・チベット語の述語(本書pp. 1-14)は同氏の『言語学の基本問題』(一九七一、東京)第七章「チベット語の述語の輪郭」を若干修正し、要約したものである。以下に、氏の論考の概略を紹介しておこう。

氏は「チベット語において述語と称すべきものは、文を直接構成する言語形式のうちの、文末に立ち、それだけで文を構成しうるもの」と規定し、それらを次のように分類しておられる。

1. 助動詞Ⅰから成る述語　2. 名詞(あるいは体言句)＋助動詞Ⅱから成る述語　3. 形容詞＋助動詞Ⅰ(または助動詞Ⅱ)から成る述語　4. 動詞否定形から成る述語　5. 動詞＋終助詞から成る述語　6. 動詞＋助動詞から成る述語　7. 動詞不定形＋助動詞から成る述語　8. その他の述語。

1. では、所謂存在の助動詞 yöö, ˈyoo-ree, duu, yoŋ (以下紹介部分では湯川氏の音素表記を用いる)類を取り上げ、それぞれの違いを説明している。(以下 逐語訳は長野)

e.g. ˈpaa ˌbugu ˈñii yöö. | 私ニ 子供 フタリ イル
ˌkoŋ la ˋteb ˋte ˋyoo ˋmaree. | 彼 ニ 本 ソノ ナ イ
ˋpaa ˌgüü duu. | ˌsañin ˋkare yoŋ?
私ニ オカネ アル | 明日 何ガ アル

yöö, ˈyoo-ree,duu, yoŋ, čuŋ の意味的な相違についての説明もあるが、紙数の関係からか、簡潔すぎる。これについては『言語学の基本問題』第七章を併読するのが有益であろう。

2. では、所謂叙述の助動詞 yin と ree の類が名詞・体言句と共に用いられる場合を扱う。

e.g. ˋpa ˌlabda ˋdii ˋlabtuu yin. | ˌkoŋ gi ˌžam
私ハ 学校 ヨノ 学生 デス | 彼 ノ 興サンハ
ˌsüü ˌsäämo rää?
誰ノ オ嬢様 デスカ

3. e.g. ˋpa ˋdebo yin. ‖ ˌkoŋ gi žam ˋzeebo
私ハ 元気 デス ‖ 彼 ノ 興サンハ 美シイ
ˋyoo-ree. | ˋmedoo ˋdi ˌmaamo duu.
ノ デス | 花ハ ヨノ 赤イ デス

4. e.g. ˌkääsa ˋmačin.
昨日 行カナカッタ

5. 疑問の意味を表わす終助詞 bää, baa, gaa が動詞と共に用いられる場合。

e.g. ˉkeraŋ ˉkoŋ gi ˆsimšaa la ˋtää bää?
アナタハ 彼 ノ オ住居 ヘ 行カレマシタカ？

ˉkeraŋ ´kare ˆčää-nää ˋmapee baa?
アナタハ 何 故 ニ イラッシャラナカッタノ？

´ŋa ˋčin gaa?
私ガ 行キマショウカ？

ˉkeraŋ-co ´kare ˋčöö gaa?
アナタガタハ 何ヲ 召上リマスカ？

6. この項に言う助動詞とは、過去の yoŋ を除く助動詞 I 類（所謂存在の助動詞）と、soŋ, čoo, caa, ňoŋ, du などを指す。

e.g. ˉcaŋma ˋpee ´yoo-ree.
皆サン イラッシャッテマス

ˉkoŋ gi ˆteb ˋloo ču.
彼 ガ 本ヲ 読ンデクレタ

´ŋa ˆṭaa soŋ.
私ハ 直リ マシタ

ˆŋää ˆteb ´di ˋloo caa.
私ハ 本 コノ 読ンデシマッタ

´ŋa ˆpöö la
私ハ チベットニ

´ḍo ´maňoŋ.
行ッタコトガナイ

ˉkoŋ gi ˆsimšaa la ˋtää du.
彼 ノ オ住居 ヘ 行キマショウ

7. ba 不定形（完了語幹から形成される）、gi 不定形（未完了語幹から…）、ǧu 不定形（同）、zii 不定形（同）、(n) döö 不定形（同）に助動詞が結合する場合。

e.g. ´ŋa ˆteb ˉpagi ˋloo-ba yin.
私ハ 本 アノ 読ミマシタ

ˉkoŋ ˉsaňin ˉpeegi
彼は 明日イラッシャイ

ree.
マス

´ŋa ´yige ´te ´ṭiǧu yin.
私ハ 手紙 ソノ 書クトコロ デス

´ŋa ˆǧanaa
私ハ 中国

la ˆḍozii yöö.
ニ 行ク予定 デス

´ŋa ˆpöö la ˆḍondöö yöö.
私ハ チベット ニ 行キタイ

8. この項では命令を表わす形式を扱う。

e.g. ˆsöö!
食ラヨ！

ˋlooroo naŋ.
オ読ミクダサイ

以上が大雑把な紹介である。気付いた点を挙げておこう。（以下、音素表記は 北村甫『チベット語の発音』一九七四、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所言語研修テキスト に従う。）

イ、本書では八つの述語形式が併列的に挙げられているが、モンゴル語やビルマ語述語の論考（橋本 pp. 30–40、藪 pp. 41–52）の様に、言語形式による分類が為されている方がありがたい。もとより湯川氏は本稿に於いて、主として助動詞による分類を試みているのだが、そうすると分類4、5、8、が巧くゆかない。むしろ、湯川前掲書、第七章での、名詞述

語〉〈形容詞述語〉〈動詞述語〉に〈間投詞述語〉を加えた分類の方がすっきりするのではないか。

ロ、p.3 ℓ. 7-8「-'a yöö は、……推量疑問をあらわす」とある。-'a yöö (p.4 -'a yiN も同様) は、確かに yöö・ba draa 等の推量を表わす形式のうち、疑問を表現し得る唯一のものであるが、必ずしも常に「疑問」にのみ用いられる訳ではない。相手の言ったことを、「そんなことはあるまい」「まさか」と打ち消す場合、-'a yöö, -'a yiN を頻繁に用いる。湯川氏はこれに「あるかしら」と訳をつけているが、yöö・ba draa (yiN・ba draa) 系統の表現の中で、これを話し手の主観に於ける probability の度合いによって位置づけるなら、-'a yöö は yögi maaree と (-'a yiN は yingi maaree と) 非常に近いのだから、むしろ「ないだろう (?)」「なさそうだ (な?)」と解すべきではなかろうか。

ハ、p. 4 ℓ. 11「-'a ree とか yinba 等といったものはない」とある。-'a ree は確かに無いが、yinba は存在する。e.g. -kyeraN 'pöba yinba? アナタハ・チベット人・デショ。

ニ、p. 7 ℓ. 5-8「gaa は……未完了語幹に続いて、話し相手もしくは話し相手と自分を含む集団の未来の行為に関して話し相手の意向を問う第二疑問をあらわす述語となる」として、'nganyii 'kabaa 'dro gaa? 私達フタリハ・ドコニ・行コウカ? ‖ -kyeraN・tso 'kare 'cöö gaa? アナタガタハ・何ヲ・召上リマスカ? という例文を挙げている。二番目の例文は問題ないが、初めの文は 'nganyii 'kabaa '*tüü* gaa? の様に敬語形の動詞を使うべきである。湯川氏の二人のインフォーマントのうちの一人 (ラサ語の話し手だが、ツァン方言の特徴をも持っている) と、他のラサ語の話し手から私が教えてもらった限りでは、〈相手と自分〉の未来の行為に関して相手の意志を問う場合、動詞は必ず敬語形を用いる。第二疑問 (湯川氏の用語法で、疑問詞を含んだり選択枝によって答えを要求するもの・これに対して、ハイ／イイエの答えを要求するものを第一疑問という) では、この制約は厳密に守られている。但し、第一疑問になれば話は別で、例えば、'togoN 'nyanboo-trom la '*drogää*? 今夜・一緒ニ・市場ヘ・行コウカ?といった文では、普通形の動詞を用いる。

ホ、分類7に zii 不定形を含めるなら、loN 不定形も入れるべきだろう。e.g. 'nga 'daNgoN 'kalaa 'saloN macuN. 私ハ・昨晩・食ベ物ヲ・食ベル暇ガナカッタ。

(アジア・アフリカ文法研究　四　特集：述語、一九七五・一二・二五　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所刊　B5 159+3 ps. 非売品)